

校 園 名：(国立大学法人) 熊本大学教育学部附属小学校

所在地：〒860-0081 熊本市中央区京町本丁5番12号

記載日：平成28年5月19日 記載者：黒川哲治 記載者役職：副校長

貴校の校風、おおまかな特色について：

明治7年、熊本市新町に「熊本仮師範学校附属校」として開校し、142年目を迎える学校である。昭和26年「熊本師範学校」は廃止され、現在の校名に至る。

児童と教職員が生き生きと活動し、自発的精神に満ちた、明るい挨拶と思いやりにあふれた学校である。また、保護者と教職員が一体となり、児童の豊かな教育活動を支援し、教育環境を整え、地域との連携を図りながら、開かれた学校の実現に努めている。

本校の伝統行事として、「うさぎ狩り」「林間学校」「臨海学校」等がある。児童・保護者はこれらの伝統行事に魅力を感じて、是非、体験したい・させたいという思いで本校を希望される方も多い。「清らなる 瞳つどいて・・・」で始まる校歌は、児童のみならず、PTA 歓送迎会等で保護者も全員で斉唱する。附属小の誇りが歌詞に表れており、児童・教職員・保護者が、附属小への思いを共有している。

貴校の卒業生の活躍状況について：

①追跡調査はしていない

②ほとんど把握できていない

③本校には同窓会（年1回定例会）及び学校評議員会（年2回定例会）組織がある。その2つの会が、ある程度卒業生の活躍状況を個人及び同窓生のネットワークで調査できるものとする。

○藤田嗣治（故人）：国際的に著名な画家

○細川隆元（故人）：政治評論家

○平野龍一（故人）：元東京大学総長

○細谷英二：りそなホールディングス会長

○有田哲平：上田晋也とクリームシチューを結成、お笑い芸人としてTVで活躍

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

①追跡調査の類いではないが、毎年度「旧教官（OB）及び現職員名簿」を更新している。

②昭和40年度以降の転出者（旧教官OB）について把握できている。現役の各教科等教職員が毎年度、調査して把握している。

③県教育庁及び市教育委員会・各教育事務所等への現役指導主事等の内訳

県教育庁4名（学校人事課1名、義務教育課2名、体育保健課1名）

市教委4名 教育事務所1名

魅力ある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

1 地域に開かれたオープンスクールの開催

平成23年度に第1回目のオープンスクールを開催し毎年継続している。具体は、以下の通りである。

(1) 主 催：附属小学校PTA 及び附属小学校 協賛：熊本大学教育学部

(2) 目 的：普段の授業では学べない各教科等の体験学習（実技、実験、ゲーム、疑似体験など）

(3) 対 象：地域の幼児・園児、小学生、中学生（附属小児童も参加）

(4) 時 期：11月の土曜日の半日

(5) 内 容：国語教育サロン、算数・数学サロン、スポーツ・ラボ、理科・科学ラボ

参加の呼びかけは、開催ポスターを近隣の幼稚園・保育園、小学校、中学校等に配付している。平成27年度は、算数・数学サロン、スポーツ・ラボの2教科の実施になったが、参加者は100名を越えた。参加者は、それぞれのブースに行き、興味のある内容のプログラムに挑戦していた。運営は、教育学部生が準備した教材を中心に主体的に行っている。地域には、教科等にかかる本校での学習を体験的に学ぶ機会となり、附属小学校、附属中学校への入学希望にもつながっている。学びの場・研究の場として、附属小学校の役割を周知することもできた。また、教育学部生にとっては、教育実習とは別に、児童と直接触れ合う事で、教育への意欲につながる体験ができています。教育学部の教授からの支援があり、オープンスクールを通して本校職員との研究体制・教育学部との連携も深まっている。



算数サロン：数字あそび（幼稚園から）



スポーツ・ラボ：ミニハードル

2 伝統行事（うさぎ狩り、臨海学校、林間学校）

保護者に本校の入学希望の動機を尋ねると、「うさぎ狩り」等の伝統行事を子どもに経験させたいという声が返ってくる。伝統行事に情熱をかけて指導する教職員、本番に向けて本気で訓練に取り組む子どもたち。友との協力・絆、集団の中の自己、感謝の心の醸成・・・学ぶ意味合いは大きい。

(1) うさぎ狩り

著書「百年のあゆみ」に明治30年代に始まったという記述がある。当時は、12月15日に行われ、朝暗いうちに集合、わらじばきで、にぎりめし、おかずは、けずりぶしと梅干しを袋に入れ、腰にさげて狩りを行った。勢子隊と網隊で編成し、夜がほのほのと明け始める頃、勢子隊の「チョーイチョーイホーイホーイ」と大きな声と竹の棒で地面を鳴らしながら、網隊へ追い込む。当時から、耐寒訓練、集団行動訓練（静粛迅速・無言）、自然体験を目的に行ってきた。現在も「うさぎ狩り」の伝統は、脈々と受け継がれている。近年、うさぎの捕獲数は、0羽か1羽である。捕獲したうさぎは、全狩り場を終了した後、全員で勝ちどきあげ、野山に返すようにしている。学校に帰って、給食部と保護者で協力して矢開きを行う。昨年は、1、2狩り場で2羽ずつ、計4羽捕獲でき、過去の記録を見ても最高の捕獲数であった。児童も参加した保護者も達成感を味わうことができ、伝統行事を堪能した1日となった。



網隊にうさぎを追う勢子隊



狩り場納め 勝ちどきをあげる

(2) 臨海学校

著書「125周年記念誌」に、昭和30年代には既に臨海学校が実施されていたという記述がある。その後、実施されない期間もあったが、昭和52年に5年生で臨海学校が復活した。臨海学校のテーマは、「自主・自立・鍛錬・協力」である。また、目的は、「自然体験」「心身の鍛錬」「協力・主体性」である。臨海学校のメインは遠泳である。昨年は、7月13日～15日に芦北の海で、約300メートルの遠泳を実施した。泳ぎに自身のない児童は、6月からの朝練・夕練に参加し、遠泳に適した平泳ぎをマスターする。泳ぎに自信のある児童も、底の見えない海を泳ぐとなると、恐怖心もあり簡単に泳げない。前日から海での遠泳訓練を行い、本番に備える。教職員十数名、教育学部の学生十数名と保護者の協力を得て、安全に万全を期して実施した。118名全員が完泳。目的を達成することで、児童の成長・生き方の礎となる。今後も児童の成長を期して継続を図っていく。



全員完泳目指してエール



力を振り絞って完泳

(3) 林間学校

林間学校も昭和中期頃には実施されている。登山場所として、長崎県の普賢岳・多良岳、鹿児島県の韓国岳・新燃岳、大分県の久住岳の五カ所から選定している。テーマ及び目的は、臨海学校と同様の「自主・自立・鍛錬・協力」及び「自然体験」「心身の鍛錬」「協力・主体性」である。6年生は修学旅行を兼ねて実施している。安全確保のため、教職員十数名が同行する。登山中心であり、目的に着いた時の達成感や爽快感は体験者のみ感じることができる。



登山 まだ頂上は遠く



登山 中腹で休憩



目的地の頂上

3 災害時（熊本大地震に係る）における地域への貢献

平成28年4月14日（木）午後9時26分頃、前震、震度6弱、マグニチュード6.5の地震が起きた。4月16日（土）午前1時25分頃、本震、震度7、マグニチュード7.3の大地震が熊本を襲った。校舎の被害も大きかったが、近隣住民も住宅の損壊があり、本校と隣接する公立中学校に多くの市民が避難した。その数が一時、3000名を越え、体育館施設・教室・運動場に入りきれない状況になり、附属中学校及び附属小学校にも避難場所を求めた住民が押し寄せた。本来、本校は、運動場のみを開放する一次避難所の位置づけである。しかし、非常時の緊急事態であり、体育館を安全な避難所として開放した。開放した期間は、4月17日（日）～4月28日（火）の12日間であった。

また、最大、体育館・運動場で約300名の市民を受け入れた。熊本市からの人的支援や物的支援が

ない中、教職員が24時間態勢、食事の提供に係る業務、消灯等の管理を行った。今回の大地震、避難所としての対応・役割を経験して、指定避難所の有無に関わらず、地域の中に立地する附属小ならば、最大限の協力・支援を地域住民のために行動する事が、地域の信用につながり、地域の貢献へとつながることを確信した。食糧の支援は、ボランティア団体や個人、附属小保護者から適宜行われた。また、本校の備蓄倉庫に、飲料水やアルファ米などがあり、初期対応ではとても役に立った。



避難場所となった体育館



保護者炊き出しボランティア

4 公立学校の教育への貢献と信頼

本校の使命の一つに「公立学校の教育に協力する」がある。当然、研究発表会により、もう一つの使命である「教育理論及び教育の実際に関する研究並びにその科学的実証を行う」を実践している。公立学校の教育に資するという観点から、まず、各公立学校から校内研究の講師依頼については、積極的に引き受けている。公立学校の研究推進及び公立学校教員の資質向上に寄与し、本校職員の研鑽にもつながると考える。次に、県市の各研究大会にも授業者や助言者等の派遣依頼があった時も積極的に引き受けている。年間で50回から60回の派遣依頼に対応している。また、国語科は、以前から県国語研究会事務局としての役割を持ち、県の国語教育をリードしてきた実績があり、多くの会員の信頼を得ている。また、研究に関しては、先導的で魅力的な取り組みにより、全国から研究発表会に先生が来校される。以前は、一般参加者が2000名を越える盛況の時代もあった。昨今は、800名～1000名規模で実施し、多くの参加者（先生方）に各教科等で求められる教育に示唆を与えている。



国語 高学年会場

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について

実践例で記述した通り、附属小学校で学ばせたいと考えられている保護者（地域住民）が多くおられる。そして、附属小卒業生とその保護者は、附属小学校で学んだ事に誇りを持たれ、卒業後のつながり（絆）は強い。その最たる組織が、同窓会である。今回の震災後の支援など、協力体制が充実している。

また、教育実習校として、約2ヶ月期間、受け入れ指導をしている。附属学校だからできる教育実習である。更に、今後、教職大学院の運営に係る実践演習への協力、大学院生への支援も手厚くしていく。

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか

今回の熊本大地震で、地域に避難所としての責務を果たしたことは、地域に開かれた学校として一步を踏み出したと考える。隣接する公立中学校の体育館は被災により使用できないため、部活動練習のための体育館借用の依頼があった。平日の放課後、借用を許可しており、学校・生徒・保護者からも感謝されている。また、研究実践校として、県内外の教職員に、先導的な研究内容を示唆し教育貢献に努めている。